

# 船に乗る馬

## — 裝飾絵画の一考察 —

甲 元 眞 之

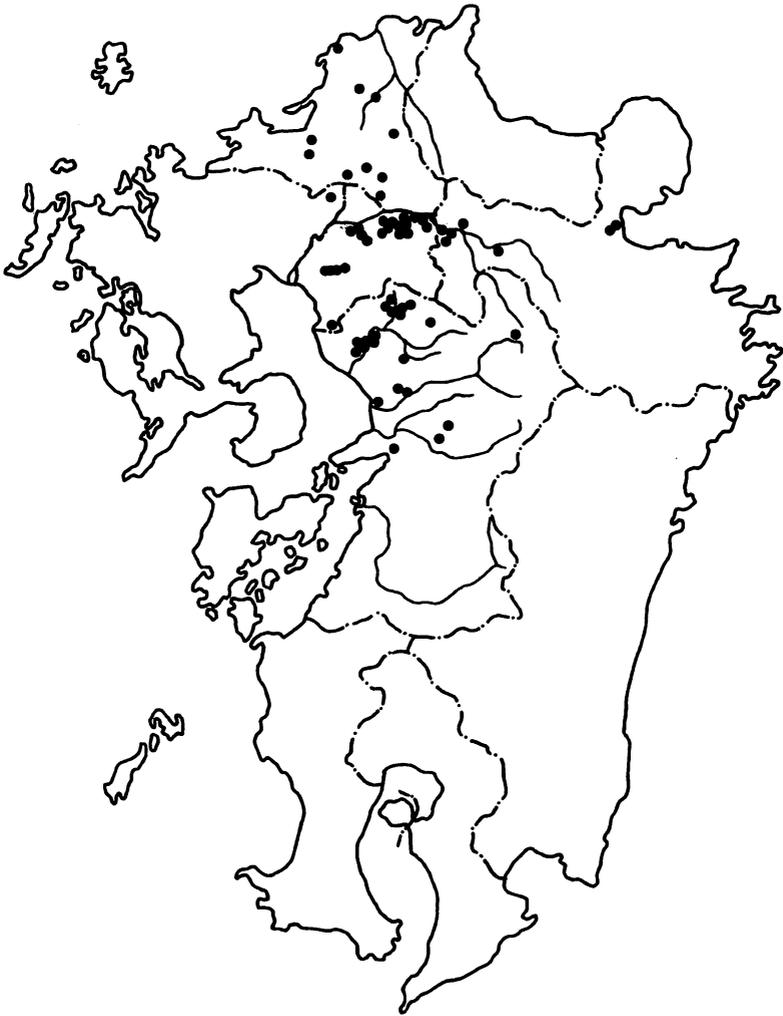
はじめに

五世紀から六世紀にかけてのころ、古墳内部に置かれた柩や石室内部に、浮彫、塗色、あるいは線刻によって各種の文様を描くことが流行した。これまでに知られたこれら裝飾古墳の数は、全国で約六百基に達している。そのうちの三割以上が熊本県内に分布し、横穴を除いて石室構造をなす古墳では、熊本県菊池川流域と福岡県筑後川流域が全国の裝飾古墳発見例の約半数近くを占めている（第一図）。日田地域を含めた筑後川流域の彩色絵画の出現と展開に関しては、石屋形や石棚などの独特の石室構造をもつことから菊池川流域との関連が想定され、裝飾古墳研究においては熊本県北部地域が最も重要な位置を占めていることが既に指摘されている。しかしこれまでは裝飾古墳の絵画のもつ特異性が強調され、それらに関する図録その他の出版が盛んに行われてきたにもかかわらず、菊池川流域における古墳文化変遷過程を視座に置いての、裝飾古墳の成立と展開に関する構造的な研究と分析は、ほとんどなされて来なかったと言っても過言ではない。

裝飾古墳研究の出発点となる「分類」については、これまでに様々になされてきたが、石棺系裝飾、石障系裝飾、壁画

船に乗る馬（甲元）

船に乗る馬(甲元)



第1図 九州の彩色絵画古墳分布図

系裝飾、横穴系裝飾に区分する小林行雄氏の分類が今日多く使用されている。<sup>2</sup>しかし石障系古墳の成立に関して、箱式石棺墓との関連を重要視する立場では、これに箱式石棺系を加えるのが妥当であるし、歴史的なつながりを重視する観点からは石棺系から石屋形系を分離するほうが有意味である。<sup>3</sup>それぞれの裝飾をもつ初現の古墳としては、横穴系は熊本県山鹿市付城横穴群（六世紀第一四半期）、石障系は熊本県八代市長迫古墳や大鼠蔵尾張宮古墳（五世紀第一四半期）、石屋形系は熊本県玉名郡塚坊主古墳（五世紀第四半期）、箱式石棺系では熊本県天草郡広浦古墳や八代市門前2号墳（四世紀第四四半期）などを挙げることができ、壁画系は山鹿市臼塚古墳（六世紀第一四半期）からはじまる。石棺系では福岡県八女郡石人山古墳が最も古く、五世紀の第二四半期に位置付けられるが、石棺に裝飾を施す技法は小林氏が指摘するように、<sup>4</sup>大阪府柏原市安福寺の石棺など竪穴式石室に納められる例があり、前期古墳出土石棺との関連で解釈が可能ともなっている。しかし突如としてこの地域に出現したことの歴史的意義については、なお未解決の問題を多く孕んでいるといえよう。石人山古墳の直弧文を施した石棺以外、筑後地域においてはこの種の文様を刻んだ石棺が未発見であり、熊本県の有明海か不知火海の周辺部から持ち込まれた可能性も依然として残されており、菊地川中流域に所在する鹿本郡鹿央町の岩原古墳の内部主体に、石人山古墳の石棺と同様な裝飾文が施されている可能性は少なくない。このように見て来ると、裝飾古墳の形成にあたっては熊本県下に展開した古墳時代の動向が大きな鍵を握っていたことが窺えよう。

—

裝飾古墳に描かれた文様の中で、直弧文や軀、楯などの防具類は辟邪の思想を表したものであり、広浦古墳などの石棺に刻まれた文様は、死者に備えるための副葬品であったと推定されるほかには、<sup>5</sup>考古学の立場から裝飾のもつ「意味」に関連してこれまでに積極的と言及されることはあまりなかった。こうしたなか松本信広氏は福岡県珍敷塚古墳や鳥船塚古墳で発見された裝飾文様につき言及し、「天の鳥船」との関連を初めて示唆したのである。<sup>6</sup>日月の運行の担い手として、

船に乗る馬（甲元）

## 船に乗る馬(甲元)

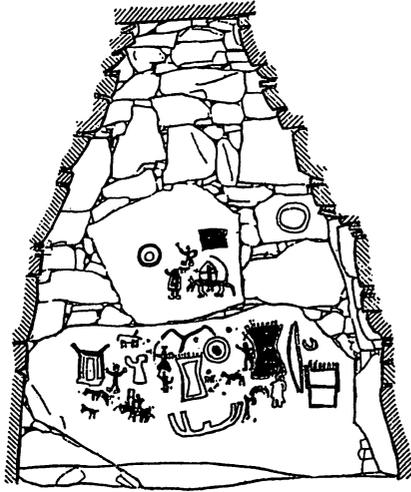
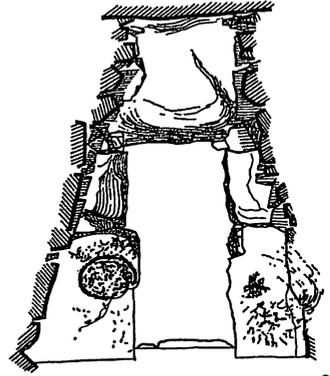
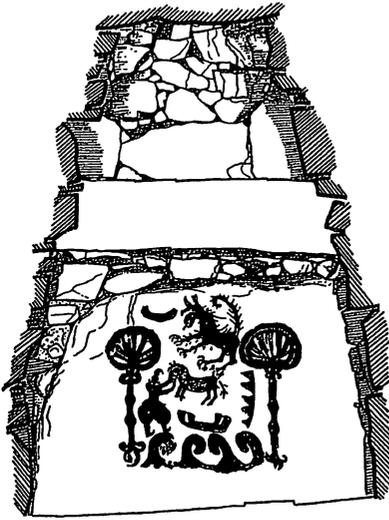
東南アジアでは船が、北アジアや中国では車が重要視され、鳥船塚古墳(第2図4)や珍敷塚古墳(第2図5)などに描かれた船を漕ぐ状況は、中国南部や東南アジア大陸部に広がる銅鼓の図像と一致することから、天の鳥船信仰は日本の古代文化の中に潜む南方系要素の一つとして松本氏は位置づけたのである。そしてこの船の働きは「死後の靈魂が太陽の方向にある黄泉の島に行くときの手段」と想定した。この松本論文はかつて米田庄太郎氏により、日本神話にみられる天鳥船は世界各地にみられる魂の運び手としての船と共通し、「靈魂の国が海または河の彼岸にあると信ぜられる処では、死人船の觀念が生起する」とした論<sup>7)</sup>を發展させたものである。

漢代においては天空を駆ける車は龍車と呼ばれていた。一方漢代もしくはそれ以前の長江流域では、昆崙への旅立ちには鳥と龍が重要な役割を果たしたのであり、<sup>8)</sup>車は漢代になって龍と結びついたとするのが妥当である。中国の殷代においては、神や靈魂は白馬で訪れることが白川靜氏により論じられており、<sup>9)</sup>古代中国においては魂の担い手として、北方地域の鳥または犬と馬、中・南部地域の鳥または船<sup>10)</sup>龍(龍船)との対比としては択えることができる。

装飾絵画に関するもう一つの論攷は、福岡県竹原古墳を題材にして金関丈夫氏により展開されたものである。<sup>10)</sup>金関説によると、竹原古墳の奥壁に描かれた絵画は一幅の意味ある全体像であり、鬚の存在と船や波文などはそれが水辺での神聖な行為であることを示しているという(第2図1)。上方にやや不釣り合いに躍動的に描かれた動物は、尻尾や指先の特徴から龍を表示したものと解釈し、龍と馬との結びつきこそがこの壁画のライト・モチーフであると想定したのである。右側の鬚と馬の間にみられる赤と黒で交互に描かれた三角文は、本来は五彩であり、それは『管子』に言う「龍の衣服」を表示することからも、この絵画の中では龍が大きな意味をもっていると推定した。従ってこの全体像が表す内容は、「駿馬を得るために龍の棲む特定の水辺に牝馬を率いて、龍媒を求めるとするものであり、漢学に造詣の深い金関氏の論証は考古学者からも高く評価されてきた。<sup>11)</sup>

しかしこの説に問題がないわけではない。まず日本の装飾古墳に描かれた絵画は葬送儀礼の一環として描かれたはずで

船に乗る馬(甲元)



第2図 裝飾壁画 1:竹原古墳奥壁、2:竹原古墳前室、3:五郎山古墳奥壁  
4:鳥船塚古墳奥壁、5:珍敷塚古墳奥壁

## 船に乗る馬(甲元)

あるから、こうした絵画は第一義的には葬送儀礼に関する内容であったはずであり、次に具象的な絵画表現を示す事例は竹原古墳だけでなく、ほぼ同時期に近接して営まれたそのほかの類似した内容を表す古墳絵画に対しても、全体として统一的に解釈できることが求められるからである。したがってまず、葬送儀礼のイデオロギーでこれら装飾古墳の全体的解釈が可能か否かを検討する必要があることになろう。

## 二

装飾古墳のうち具象的な表現をもつ例として福岡県五郎山古墳、竹原古墳、珍敷塚古墳、鳥船塚古墳の絵画を挙げることができる。<sup>12)</sup>

五郎山古墳は福岡県筑紫野市原田に所在する直径約三二米の円墳で、複室構造をなす横穴式石室墓の奥壁と左右の側壁奥側に具象的な絵画が描かれている(第2図3)。奥壁の腰石中央部に一雙の船が描かれ、その左側には騎馬人物二人とそれを先導する犬二頭が、その上方には霊屋(殯屋)に向つて折る二人と、矢を番える装備をつけた人物像がある。また画像中央から右側には大きく描いた鞆と弓、そしてそれら武器の間を縫うようにして、四人の人物と鳥、馬などが小さく描かれ、円文がちりばめられている。腰石上部の奥壁には円文に向かつて踊る二人の人物と二匹の犬、騎上で矢を番える人物がみられる。また左側石には一雙の、右側石には二雙のそれぞれ棺と想定される箱を載せた船と円文が表現されている。楯、鞆、弓、鞆などは死者の靈魂を保護するものであるとすれば、矢を番える人物は新しい魂を悪霊から護る役割が想定される。円文が黄泉の国を象徴する日月星辰であり、腰石に描かれた霊屋の前で折る人物、腰石上方の奥壁に描かれた人物が歌踊音曲するしぐさとみると、そこに一貫した葬送儀礼が描かれているとの推定が可能である。腰石左側に描かれた騎馬の人物のうち手前側の人は黒色で区画された方形の中に赤い三点の円文を飾る「もの」を手をしている。これは従来楯であろうと想定されてきた。しかし装飾古墳の文様にみられる楯は上端がどれも「山なり」になる特徴を示してい

ることから、別の「もの」を想定しなければならぬ。また腰石中央上段に緑色で屈折した「大」字形に描かれた図形は鳥の羽ばたく姿とされてきたが、鳥像は他の事例ではもつと鮮明に描かれていることから、衣笠を抽象化したものか、腕手文の変形と見るのが妥当であろう。五郎山の装飾絵画では、楯や鞆で示される伝統的な辟邪思想とともに、新しい葬送儀礼の思想が混在している状況とみることができよう。

竹原古墳は福岡県鞍手郡若宮町の諏訪神社境内にある、複室をもつ約三十米ほどの前方後円墳で、奥室の壁画を描いた上方には、菊地川流域に起源をもつ大きな石棚を構えている。前室の左右の奥壁に玄武と朱雀が描かれ（第2図2）、奥室腰石には左右に描かれた大きな鬃と下方の大きな波と船で区画された空間に、馬と馬の手綱をとる武器に身を固めた人物、その上方にいななく一頭の馬と小さな船が配置され、右側の鬃と馬の間には五色の三角文を意図したものが黒色と赤色で交互に塗られている（第2図1）。先に紹介したように金閼氏はこれを「五旒」であると考定されている。五旒であっても「龍の衣服」以外にも考える余地はある。むしろ葬送儀礼に関係する点では、『荆楚歳時記』五月の条にある、

五彩の絲をもつて臂に繫け、名づけて辟兵と曰う

に通じるものであり、五彩は「辟邪」を象徴するとの解釈も可能である。すると前述した五郎山の騎馬人物が保持する「もの」も「辟邪を象徴する」幟であり、次に述べる珍敷塚古墳で、船上に描かれたり、人物が手にもつ縦長の方形区画、鳥船塚古墳の船上に二本線で記された文様などは、死者の魂を擁護する道具だてと見なすことができよう。そのことはまたこの幟の存在により、「死者の魂」がここにあることを表示しているとも言える。具象的な像が少ないことから、この竹原古墳の絵画だけではその意味を汲み取ることができないが、まずは「神聖な行為の一環として馬を船に乗せようとしている」情景を描いたものと推定できる。

珍敷塚古墳は福岡県浮羽郡吉井町の耳納山麓に広がる大古墳群のうちの一基で、一九五〇年に土取工事により発見されたが、それにより破壊され、今日奥石と側石の一部を留めるにすぎない。奥石中央部に大きく鞆を三個描き、その間に大

## 船に乗る馬(甲元)

大きく伸びた藤手文を配して、画面左端には大きな円文とその下方に船を漕ぐ人物と舳にとまる鳥、画面右端には飾りのついた幟をもつ人物と二匹の蟾蜍と小さな同心円文があり、末端部には岸に留まる鳥の構図になっている(第2図5)。この右端に描かれた鳥とするものはあるいは岸に立てられた衣笠かもしれない。二匹の蟾蜍の存在から右端の図像は月と想定され、中国的な観念の下に創作されたことが窺えることから、左端の円文は太陽の象徴と見ることが出来る。壁画中央に大きく描かれた靱と藤手文は、画題が魂の浄化という神聖な状況であることを表現していると解釈され、全体として日月が宿る天空に死者の魂が運ばれる状況を読み取ることができよう。

鳥船塚古墳は珍敷塚古墳の南方三百米に所在する古墳で、珍敷塚古墳と同様に破壊され、石室の一部のみが残されている。奥壁腰石の中央部に武装した人物と櫓を漕ぐ人物があり、船の両端には鳥が、船の前方よりには箱形のもの描かれ、前方の鳥と箱、後方の鳥と人物との間には、二本線で表現された幟がはためいていて、死者の魂がここにあることを表し、死者の魂を護ることが示めされている。船の上方には円文が、左上方には二対の靱と太刀が、腰石上方の奥壁には一点の楯がそれぞれ配されていて(第2図4)、従来の辟邪思想の幾分かを留めている。船首の前方に二本の上下に交差する図像は、珍敷塚古墳と同様に黄泉の国(魂の永遠の休息地)の岸を表現したものとみることが出来る。<sup>13)</sup>

これら四件の絵画に出現するモチーフとしては円文、各種の武器、幟、船、鳥、馬、犬、人物を挙げることが出来る。日月星辰が死者の魂がたどり着く世界(天あるいは海の彼方)を象徴するものとすれば、これらの具象的絵画の内容は、「死者の魂が船に乗り鳥に先導されてあの世に行く」行程を描いたものと統一的に解釈することができよう。

こうした魂の担い手としての船や鳥の存在は、銅鐸の絵画や鳥取県角田遺跡出土土器に描かれた絵柄から弥生時代にまで遡る可能性については、国分直一氏や金関恕氏<sup>15)</sup>が力説するところであり、また最近荻原秀三郎氏によってこの問題は詳細に検討され、長江流域に展開した初期稲作民に淵源を辿りうる習俗であることが明らかにされている。

## 『隋書』倭国伝』の、

葬に及んで屍を船上に置き、陸地これを牽くに、或いは小車をもつてす。

との記事を参照すると、弥生時代から古墳時代の日本では、葬送観念に「海上他界観」、「彼岸と此岸とを結ぶ船と鳥」のモチーフが存在していたことは確実であろう。

しかし竹原古墳にみられる玄武と朱雀、珍敷塚古墳の蟾蜍などの存在は、日本在来の思想の中には窺われないことから、金闕丈夫氏が指摘するように、この時期、新たな大陸のイデオロギーがもたらされたことが推測され、装飾古墳に描かれた馬や騎馬人物、犬などの図像は新たな思想の導入を反映していると想定されるのである。

三

九州の装飾古墳の中で彩色により馬が描かれる事例としては、前述した五郎山古墳、竹原古墳を除くと次のような類例が知られている。

一 薬師下南古墳	福岡県久留米市草野町	騎馬
二 清澄橋古墳	福岡県浮羽郡田主丸町	馬
三 日ノ岡古墳	福岡県浮羽郡吉井町	馬
四 桂川王塚古墳	福岡県嘉穂郡桂川町	騎馬
五 田代太田古墳	佐賀県鳥栖市田代本町	騎馬
六 法恩寺3号墳	大分県日田市刃連町	騎馬
七 ガランドヤ2号墳	大分県日田市石井町	騎馬
八 永安寺東古墳	熊本県玉名市永安寺	馬
九 弁慶ヶ穴古墳	熊本県山鹿市熊入町	馬

船に乗る馬(甲元)

## 船に乗る馬(甲元)

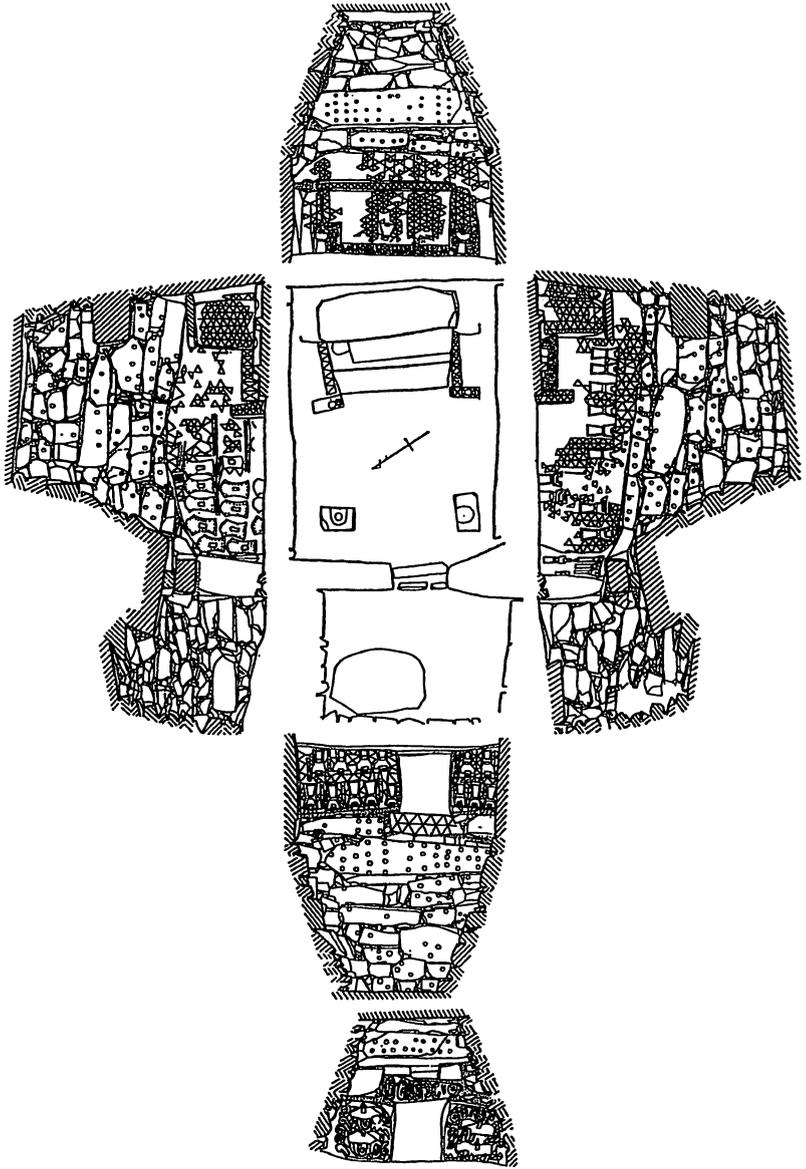
この他に福岡県浮羽郡吉井町原古墳にも船に乗る馬が描かれていたことが推測されている。<sup>17</sup> 日下八光氏の模写では船に乗り、右側に頭を向けた馬が表現されているが、今日壁画の剥落が激しく、その当否は明らかにし難いために詳細は不明である。<sup>18</sup> また観音塚古墳の奥壁には数隻の船が描かれているが、そのうち右端にある図像を「船に乗った騎馬」とするには、不鮮明なことから躊躇を覚える。

以上の古墳の中で年代的に最も遡上すると想定されるのは、日ノ岡古墳である。この古墳は全長が七四米を測り、一周濠をもつ前方後円墳で、単室の胴張りのする横穴式構造の石室をなす。羨道部分が長大化する以前の短い類型に属し、六世紀の第二四半期の築造(磐井の乱後)と想定されている。<sup>19</sup> 馬像は石室左側壁に三角文や円文に混じってわずかに一頭みられるだけであり、竹原古墳などにみられる明瞭な葬送のイメージには欠けている。

これに続き馬の登場する図像が描かれた、六世紀の第三四半期に比定される古墳として、桂川王塚古墳、田代太田古墳などを挙げることができるが、王塚古墳では馬は両側の前室奥壁に描かれたものであり(第3図)、死体を納める石屋形や石屋形を包む石室全体は三角文や円文、楕形文で埋め尽くされている。馬の持つ装飾的意味はこの他の装飾古墳にみられるものとは全く異なっていること、副葬品として多数の馬具や武器・武器を所有することなどから、むしろ被葬者の生前においての「派遣軍の上官」としての誇らしい状況を物語るがごとき構図となっている。また田代太田古墳では人物や馬に乗った人物、船などが同一の空間に配置されている。三角文や円文、楕形文などに挟まれて、明瞭な葬送のアイデアロギーが認め難い構図となっている。薬師下南古墳では奥室左側の壁に、旗棹もつ騎馬が描かれていて、あるいは死者を象徴することも考えられるが、肝心な奥壁に装飾を欠くために、その意味は判然としない。清澄橋古墳では馬は単独に表現されることから、葬送儀礼との関連は定かではない。これらに対して馬が船や鳥などと結びついて明確な葬送儀礼を表現した事例は、これよりやや築造時期が遅れる古墳に認められる。

弁慶ヶ穴古墳に見られるように、船と結びつく図像をもつものとして玉名市永安寺東古墳を挙げることができよう。こ

船に乗る馬 (甲元)



第 3 図 王塚古墳石室実測図

## 船に乗る馬(甲元)

の古墳では裝飾文様として円文や三角文とともに船と馬が描かれるが、馬は一匹前室左側壁に、船三隻は前室右側壁にあり、両者が同一画面に意味ある組み合わせで登場することはない。永安寺東古墳は切石を使った石室構造の特徴から六世紀末に築造されたものと想定されることから、「葬送儀礼における馬のもつ意味を忘れかけた時期の壁画」とも解釈される余地もある。これに対して馬が船や鳥などと結びついて同一のシーンに現れ、明瞭な葬送儀礼を表現した事例としては、竹原古墳、五郎山古墳、弁慶ヶ穴古墳などがあり、その時期を、六世紀の第三四半期から第四四半期の交、前後に築造されたものであるとさらに限定できる。

これら特殊な葬送儀礼を表現すると想定される裝飾が施された古墳は、竹原古墳などの前方後円墳か、もしくは五郎山古墳や弁慶ヶ穴古墳などその地域を代表する大型円墳であり、いずれも六世紀後半段階での古墳所在地域の特定有力者の墓と見なすことができる。

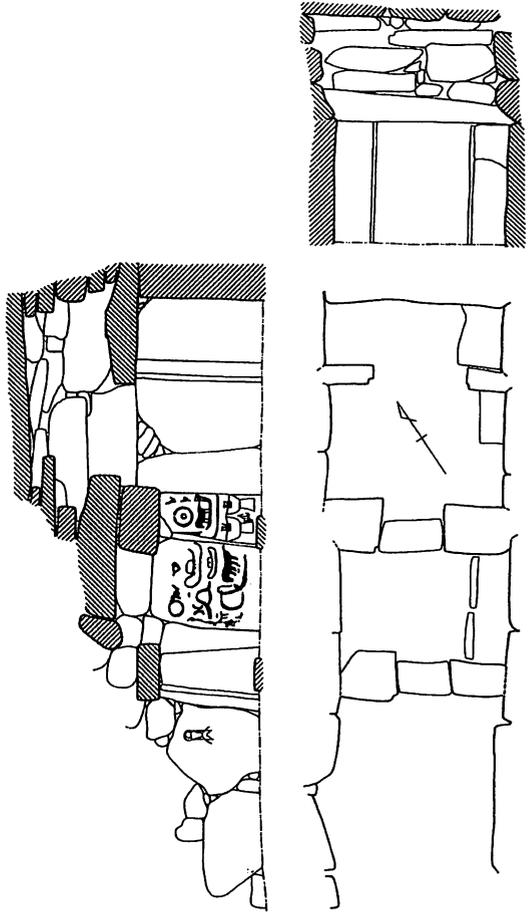
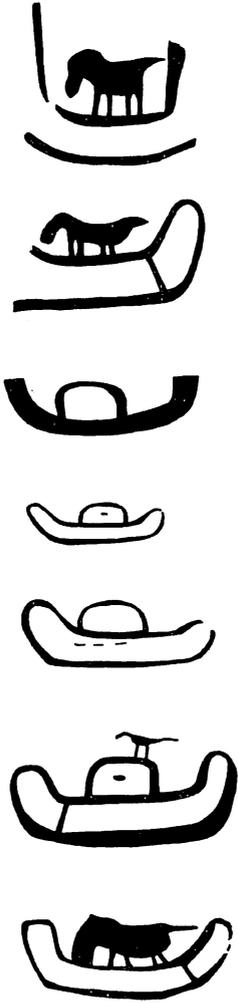
葬送儀礼に船が伴うことは、海上他界観をもつ集団に於いては通常の現象であるとすると、馬はどのように考えられるであろうか。これについて斎藤忠氏は「乗り主のいない馬は死者を運ぶものであり、死者を運ぶ船とともに、恐らく死者の靈魂を送るためのもの」と想定し、白石太郎氏は馬も船と同様に「魂の乗り物」であろうと指摘している。<sup>21</sup> 弁慶ヶ穴古墳に於いて、船上に馬が描かれる場面と船上に箱形の容器物が認められる場面があり、箱形の容器物の上に鳥がとまっていることから、この箱形の容器物は棺であり、靈魂が存在していることを表示している。このように馬と棺が互換性をもつと理解されていることは、馬が棺と同様に死者の魂を留めるものであったことを如実に示すものである(第4図)。

こうした「魂の運び手」として馬が重要な役割を担う事例は、古代の東北・北アジアに広く認められることができる。

『後漢書』「烏桓伝」には、

俗貴兵死、斂屍以棺、有哭之哀、至葬則歌踊相送。肥養一犬以彩縷牽、併取死者所乘馬衣物、皆燒而送之。言以属犬、使護死者靈帰赤山。赤山在遼東東北數千里、如中国人死者魂帰岱山也。

船に乗る馬（甲元）



第4図 弁慶ヶ穴古墳石室実測図と裝飾モチーフ

船に乗る馬(甲元)

とあり、鮮卑族などにもこうした観念が強く見受けられ、また扶餘族の墓に比定される老河深遺跡でも多数の馬の随葬墓が発掘されている。<sup>(22)</sup>さらに百済の王墓である石村洞古墳でも馬の随葬が認められることは、こうした馬にまつわる葬送観念が少なくとも朝鮮南部(百済)にもあったことが窺えよう。

四

弁慶ケ穴古墳などに描かれた装飾モチーフが、「馬の背に乗って死者の魂があの世界に行く」という考えの反映であるとすると、古墳の年代観からそうした観念は極めて限られた時間帯の中で出現したことがわかる。また極く短期間のうちに、しかも点的にこうした葬送観念が受容されるという現象は、ただ単に「文化伝播」では解釈し難いことを示している。従来こうした装飾古墳の出現に関して、「朝鮮出兵」に関連して説かれることが多かった。<sup>(23)</sup>そこでは五世紀末から六世紀段階での九州地域の特定有力者が、大陸の新しい思想と身近に接する機会として、『日本書紀』に拠り当時の出兵関連記事を取り上げてみよう。<sup>(24)</sup>

○雄略二十三年四月(四七九)

仍りて兵器を賜ひ、併せて筑紫国軍士五百人を遣して、国に護り送らしむ。是を東城王とす。是歳、百済の調貢、常の例より益れり。筑紫の安致臣・馬飼臣等、船帥を率ゐて高麗を撃つ。

○継体九年二月(五一五年)

仍りて勅して、物部連を副へて、遣罷帰す。(中略)故、物部連、舟師五百を率て、直に帶沙江に詣る。

○宣化二年十月(五三七)

大伴金村連に詔して、其の子磐と狭手彦を遣して、任那を助けしむ。是の時に、磐、筑紫に留りて、其の国の政を執りて、三韓に備ふ。狭手彦、往きて任那を鎮め、加、百済を救ふ。

○欽明九年十月(五四八)

三百七十人を百済に遣して、城を得爾辛に助け築かしむ。

○欽明十一年(五五〇)

百済本記に云はく、三月十二日辛酉に、日本使人阿比多、三つの舟を率て、都下に来り至るといふ。

○欽明十四年六月(五五三)

内臣を遣して、百済に使せしむ。仍りて良馬二匹・同船二隻・弓五十張・箭五十具を賜ふ。

○欽明十五年五月(五五四)

内臣、舟師を率て百済に詣る。

○欽明十五年十二月(五五四)

有至臣が将て来る所の民、竹斯物部莫奇委沙河、能く箭を射る。

速に竹斯嶋の上の諸の軍士を遣して、臣が国を来り助けたまへ。

能く射る人、筑紫国造といふものあり。進みて弓を彎き、占擬ひて新羅の騎卒の最も勇み壮れる者を射落す。

(中略)余昌、国造の圍める軍を射却けしことを讃めて、尊びて名けて鞍橋君と曰ふ。

○欽明十七年正月(五五六)

是に、阿部臣・佐伯連・播磨直を遣して、筑紫国の舟師を率て、衛り送りて国に至らしむ。別に筑紫火君を遣して、勇士一千を率て、衛りて弥豆に送らしむ。

この他に、その後の敏達十二年十二月の条にある日羅に関する記事から、宣化二年の渡韓の一員に葦北の国造の刑部の靱負阿利斯登がいたことが知られる。

これら記事に述べられる「筑紫の軍士」、「筑紫の安致臣・馬飼臣等、船師を率ゐて」、「竹斯物部莫奇沙河」、「筑紫国造 船に乗る馬(甲元)

## 船に乗る馬(甲元)

鞍橋君、「筑紫国の舟師」、「筑紫火君」、「葦北国造刑部の靱負阿利斯登」などは、百済から要請されたという「竹斯嶋の上の諸の軍士」の実態を表すものであり、五世紀末から六世紀にかけての朝鮮への出兵記事では、軍の船団を組むことができる九州の国造クラスの人物が大きく関わっていたこと、しかもそれが五五〇年から五六六年の伽耶の滅亡時期に集中することが窺われる。彼らは岸俊男氏のいう九州の「国造軍」と言うべき存在であり、<sup>(25)</sup>それに靱負や部民が加わった集団であったことが推測できる。<sup>(26)</sup>吉田晶氏による九州の氏族一覧を手掛かりにすると、<sup>(27)</sup>法恩寺古墳やガランドヤ古墳が所在する日田に日下部が分布していることが注目され、国造軍の一員として、これら古墳の被葬者が参画した可能性が高いことを表している。

また「勇士一千人を率い」た筑紫火君についての『日本書紀』の記事には、『百済本記』を引き、「筑紫君児、火中君弟」と解釈がむづかしい注が施されているが、この「中」は可能性として菊地川流域に所在すると一般には考定されている。<sup>(28)</sup>この「中」が熊本県玉名市大字中に比定しようとすれば、<sup>(29)</sup>「火の中の君の兄」が居住する菊地川流域に展開する、六世紀後半段階に築造された比較的大きな円墳などの被葬者たちもの一部も、筑紫君に率いられた「勇士一千人」の中に含まれ、国造軍の中核として出兵したことは容易に想像でき、熊本県山鹿市小原浦田、長岩、鍋田などの馬像を浮彫りした横穴に埋葬された人々は、それらの従者であったことを想定することも可能であろう。

このように見て来ると、九州に出現した六世紀代の馬を裝飾にもつ古墳の被葬者たちは、殆どがこの欽明期の朝鮮派兵に関連した集団に属していた可能性は極めて高いと想定される。<sup>(30)</sup>

## 五

この欽明期における朝鮮派兵は百済の要請に応えたもので、大きくは百済の対高句麗との戦闘と対新羅との戦闘の二段階に分けることができる。

百済は高句麗の圧迫を受けて四七五年熊津に遷都したが、その後も高句麗の南下は続き、まず新羅と結ぶことでこの局面に対処する一方、伽耶地域をその領土に組み込むことで、勢力の拡大を図ったのである。その結果「任那」の割譲を得るとともに、聖明王二六年（五四八）以降、百済は高句麗との戦いに勝ち、漢江流域の旧六郡を回復した。『日本書紀』欽明二三年（五六二）の条に引く大伴狭手彦の活動、

遂に勝に乗りて宮に入りて、盡に珍寶賍・七織帳・鐵屋を得て還来り。

は欽明十一年（五五〇）に関連した記事と考定されることから、対高句麗との戦闘は派遣軍にとって有利に展開したことが窺え、国造軍の一員として参戦した九州の豪族にとつてもそれは同様であったと予想される。ところが新羅真興王十二年（五五一）漢江流域の百済の旧領が新羅の手に帰し、高句麗との直接の対決が回避される状況になると、百済と新羅の対立が顕在化し、真興王十四年（五五三）以後は百済と新羅の間での戦闘が持続的に行われる事態に陥った。こうした点から欽明十五年以降の派兵は、伽耶を巡る新羅との戦いでの百済支援のための参戦であった。しかし『三国史記』『新羅本紀』真興王十五年（五五四）の条、

百済明礼、加良と興に来て管山城を攻む。（中略）新州の軍主金武力、州兵を以之に赴き、戦いを交ゆるに及んで、裨将三年山郡の高千刀、急に撃つて百済王を殺す。是に於いて諸軍勝に乗じて大いに之に克ち、佐平四人、卒二万九千六百人を斬る。匹馬返る者無し。

の記事や、同年の『三国史記』『百済本紀』聖王三二年の条の

秋七月、王新羅を襲わんと欲し、親ら歩騎五千を帥い、夜狗川に至る。新羅の伏兵発し、興に戦つて乱兵の害する所と為りて薨す。

記録は、百済聖明王の親征にもかかわらず、王自身が殺されるという大敗北を喫したことを述べ、これに続き、さらに「百済本紀」威徳王八年（五六一）の条の、

船に乗る馬（甲元）

## 船に乗る馬(甲元)

兵を遣して新羅の辺境を侵掠す。羅兵出て撃ち之を敗り、死する者一千余人。

などの内容から、伽耶を巡る新羅との戦いが圧倒的に新羅優位のままに推移したことを知る事ができる。また『日本書紀』欽明二三年(五六二)の条の、

春正月、新羅任那の官家を打ち滅しつ。

との「任那」の滅亡記事は、百濟ばかりでなく、百濟を支援した日本側の完全な負け戦であったことを物語る。このことから、これらの欽明期の朝鮮での戦闘に加わった国造軍の置かれた状況は、欽明十二年(五五一)を境としてその後では大きく異なった局面が展開したことが窺える。

王塚古墳やチブサン古墳を初めとする六世紀中頃以前に築造された裝飾古墳には、馬と葬送儀礼の結びつきが明白には表現されていない。古墳築造の経緯と時期から、六世紀五十年代後半から六〇年代はじめにかけての伽耶の滅亡時に朝鮮に送り出され、悲惨な体験をした集団に関係する人物こそが、彼の地に展開していた新しい葬送儀礼を導入し、「馬」を魂の担い手として描いた古墳の被葬者であったと推定できよう。

## おわりに

葬送儀礼の明瞭な表現としての馬が裝飾絵画に登場するのは、六世紀の第三四半期から、第四四半期の交、前後と極めて限られた時期であった。それは国造軍の一員として欽明期に朝鮮に派遣された集団がもち帰った大陸地域に展開する新しい思想と類推でき、これら裝飾古墳はその新しい葬送儀礼の思想の下に営まれた墓であろうと想定してきた<sup>(30)</sup>。そこに表現された馬は「魂の乗り物」であり、それは中国北方地域で典型的にみられる葬送観念であった。ところが北・東北アジアでは死者の靈魂は、「犬に先導されて、馬に乗り」魂の故郷(天界)へ向かうのであり、日本の裝飾古墳では五郎山古墳の壁画を除いては葬送儀礼と結びついて犬が登場することはない。弥生時代からの伝統である「魂は船に乗り、海に天

の彼方に向かう」という観念が強く受け継がれ、当時の九州に於いては魂と船との結びつきから離脱することはできなかったのである。したがって六世紀後半段階の装飾古墳に描かれたライト・モチーフは、弁慶ヶ穴古墳や竹原古墳、五郎山古墳の壁画から想定されるように、「死者の魂が乗った馬を船に乗せて、鳥に先導されてあの世に送る」という新旧の思想を折衷した観念の下に表現されたとみることができる。

しかし六世紀第四四半期以降、九州在住者にとって朝鮮と切実に関係する契機がなくなると、その後築造された装飾古墳の絵画の中から馬のモチーフは喪失し、有明海一帯の石室の中に船を線刻することが再び盛んとなり、菊地川流域の横穴群にゴンドラを表示することが隆盛することとなる。したがって船像と結びついた魂の運び手としての馬像の登場は、ほんの限られた一時期の現象に過ぎなかったといえよう。

装飾古墳に描かれた絵画の中で葬送儀礼と結びついた馬の出現時期は、上述のように極く短い限られた時間帯に過ぎなかったが、それだけに海外に戦闘要員として動員され、伽耶の滅亡に併せて敗走を重ねる戦局において、死に直面した状況に置かれた集団の間でのそれは永く留めるべき鎮魂歌でもあったのであろう。

本稿の基本的な考えは、一九八一年から三ヶ年間熊本県教育委員会の高木正文氏と共同で、菊地川流域の横穴群の実測調査を行った期間中生まれた。その後一九九三年秋の、国立歴史民俗博物館主催「装飾古墳特別展示」で日下八光氏の装飾古墳の模写に接したこと、一九九六年冬に福岡大学が調査した五郎山古墳を見学したことにより、全体の構想をまとめることができた。

なお本稿は一九九七年九月の熊本大学国語国文学会で「古典と考古学」、同十月の熊本県文化財保護協会で「装飾古墳の世界」とそれぞれ題して講演した内容をまとめたものである。

本文を草するにあたり、次に掲げる諸氏に貴重な意見を賜りました。記して感謝致します。

船に乗る馬(甲元)

松本寿三郎、工藤敬一、春成秀爾、木下尚子、山崎純男、武末純一、松本健郎、島津義昭、高木正文、高木恭二、藏富士寛

注

- (1) 赤崎敏男「筑後の装飾古墳」『考古学ジャーナル』第三九五号、一九九五年。
- (2) 小林行雄「装飾古墳」小林行雄編『藤本四八写真』装飾古墳』平凡社、一九六四年。
- (3) 乙益重隆編「装飾古墳と文様」古代史発掘第八卷、講談社、一九七四年。玉利勲「装飾古墳の謎」一九八七年、高木恭二「石障系横穴式石室の成立と変遷」『宮崎クリエイト』第六号、一九九四年。さらに言うならば葬送儀礼に係わる品目においては、死体の「容れ物」としての「棺」が最も重要視されなければならないのであり、それ故に古墳装飾は棺に「辟邪」の文様が施されることから出発し、石棺や石棺の容量を拡大した石障が東部瀬戸内や畿内、地方などの遠方にわざわざ運ばれるという現象が生じるのである。藏富士寛「石室形考」『先史学考古学論究Ⅱ』熊本大学考古学研究室、一九九七年参照。
- (4) 小林行雄注(2)に同じ。
- (5) 乙益重隆編「装飾古墳と文様」古代史発掘第八卷、講談社、一九七四年。福井県小山谷古墳出土の舟形石棺の上蓋に表現された「鏡」などはその走りである。
- (6) 松本信広「古代伝承に表れた車と船」『日本民俗学』第四号、一九五四年。
- (7) 米田庄太郎「天鳥船」『芸文』第八卷第二三三号、一九一七年。
- (8) 曾布川寛「昆崙山への昇仙」中公新書、一九八一年。
- (9) 白川静「詩経」中公新書、一九七〇年。
- (10) 金関丈夫「竹原古墳奥室の壁画」『MUSEUM』第二一五号、一九六九年。
- (11) 森貞次郎「竹原古墳」小林行雄編「装飾古墳」平凡社、一九六四年。
- (12) 以下、装飾古墳に関する記述は主として、高木正文編『熊本県装飾古墳総合調査報告書』、熊本県教育委員会、一九八四年、小林行雄編『藤本四八写真』装飾古墳』平凡社、一九六四年、国立歴史民俗博物館編『装飾古墳の世界』一九九三年、藤井功・石山勲「装飾古墳」日本の原始美術第一〇巻、講談社、一九七九年、佐賀県立博物館「装飾古墳の壁画」一九七四年、坪井清足・町田章「壁画・石造物」日本原始美術体系第四巻、講談社、一九七七年、斎藤忠「日本装飾古墳の研究」講談社、一九七三年などに拠った。また五郎山古墳の壁画に関しては、福岡大学の小田富士雄、武末純一両氏の御厚意により、調査期間中に実見することができ、奥石左側と腰石上方の奥壁に描かれた動物は犬である可能性もあることが解った。
- (13) これら四件の装飾絵画は、見方によっては、同一工人の手になり、同一集団に受容されたものであり、喪屋から黄泉までの一連のモ

- チーフが表現されているとも解釈される。
- (14) 円文は四・五世紀ころの鏡の図像から展開したことが想定できる。鏡が日月と同一視され、時には辟邪を表し、天や神を象徴するものであることは、東北アジアから北アジア各地にみられるシャーマンの伝承で窺うことができるし、『日本書紀』の大日靈尊や月弓尊の誕生説話、『古事記』の天照御神、月読神の出現時の話に認めることができる。甲元眞之「鏡」金閔恕、佐原眞編『弥生文化の研究』第八卷、雄山閣出版、一九八七年参照。
- (15) 国分直「基層文化の系譜」『日本文化の古層』第一書房、一九九二年、同「方士徐福の挫折と栄光」『北の道南の道』第一書房、一九九二年、金閔恕「古代文学と考古学」古橋信孝他編『古代文学とは何か』勉誠社、一九九三年。
- (16) 荻原秀三郎「稲と鳥と太陽の道」大修館書店、一九九六年。
- (17) 金子文夫「考古遺跡」『吉井町誌』一九七四年。
- (18) 佐賀県立博物館「裝飾古墳の壁画」一九七三年、吉井町教育委員会「原古墳」一九八四年。
- (19) 石山勲「筑後」近藤義郎編『前方後円墳集成九州編』山川出版社、一九九二年。
- (20) 米田庄太郎注(7)に同じ。
- (21) 斎藤忠「壁画古墳の系譜」学生社、一九八九年、白石太一郎「古墳壁画の解釈学」国立歴史民俗博物館編『裝飾古墳の世界』一九九三年。
- (22) 吉林省文物考古研究所「榆樹老河深」文物出版社、一九八七年。
- (23) 裝飾絵画の出現と朝鮮派兵を結びつける考え方は、多くの論者が既に指摘していることである。森貞次郎「裝飾古墳の発生と展開」、『福岡県鞍手郡若宮町竹原古墳の壁画』九州の古代文化』六興出版、一九八三年、佐田茂「彩色壁画の出現と筑後の彩色古墳」『交流の考古学』一九九一年、参照。なお小林行雄氏は「もし想像をたくましくすることが許されるならば、むしろ任那遠征の体験を表現したものとみる」として、葬送儀礼とは関連させないで、朝鮮派兵と結びつけている。小林行雄注(2)参照。
- (24) 以下読みは岩波書店古典文学大系本『日本書紀』一九六七年に拠る。
- (25) 岸俊男「防人考」『日本古代政治史研究』搞書房、一九六六年。
- (26) 山尾幸久「文献から見た磐井の乱」『日本古代国家の形成』大和書房、一九八六年。
- (27) 吉田晶「古代国家の形成」岩波講座「日本歴史」第二巻、一九七五年。
- (28) 山尾幸久氏は想像に過ぎませんが、と断りながらも「熊本県北部の菊地川流域の勢力と、八女の筑紫君一族とは、久しくつながりを持っていたのではないかと思われませう」と、中の断りの所在地を菊地川流域に当てている。山尾幸久注(26)参照。また八木充氏は一九九七年六月九州考古学会主催「シンポジウム 筑紫火君の謎をさぐる」で同様の見解を披瀝された。
- (29) 現在の玉名高校の敷地付近の字が「中」である。松本寿三郎先生の御教示による。角川書店の『日本地名大辞典』や平凡社の『熊本県の地名』によると、建武二年(一三五五)の菊地武吉の寄進状、貞和五年(一三四九)の杵岐守輔重寄進状、応安八年(一三七五)近江守平某

## 船に乗る馬(甲元)

寄進状などに中村の地名があり、中村の地名が中世まで遡上することは確実である。菊地武吉の寄進状に付された坪付写に掲げられた坪名のうち三坪が、今日の玉名市大字中周辺で確認されていることから、この一帯が中世に中村と呼称されていたことが知られる。大字中は菊地川河口の洪積台地上にあり、台地下の現J R玉名駅付近で湊の遺構が発見され、台地上の北側に隣接して、律令時代の玉名郡衙関係遺跡(郡倉、郡寺、郡庁)が集中していることが発掘の結果判明している。六世紀段階の国造の居住地が後に郡衙の所在地になり、国造クラスが後に郡司に編成替えされる例が多いことから、この比定の確実性を高めていると言えよう。また付近は「田」字を記した木製鏡が出土した柳町古墳時代集落遺跡や、五世紀後半の首長墓である稲荷山古墳や伝左山古墳が、さらにここから東北に二キロほど離れた所に、大坊古墳、永安寺東古墳、同西古墳、馬出古墳などの装飾古墳が所在し、台地の東を流れる繁根川上流域の石貫に穴観音、ナギノ、古城などの装飾をもつ横穴群が多数見られることもその裏付けとなろう。今日の玉名市の中心部は律令時代には玉名郡日置郷に比定されること、菊水町出土の火葬骨壺に伴う墓誌の銅板により、玉名郡の「権掾小領」として日置氏の名が窺われることなどは、以上の考定の否定資料になる可能性がある。しかしこの点に関しては、日置郷と火のカバネは「キミ」であり、同一国内で国造とカバネを同じくし、ウジ名の異なる部十カバネのウジが分布する辺境の地域では、「国造の一族が部民を管した結果生じた」とするのが妥当であろう」との八木充氏の指摘が参考になる。八木充「国造制の構造」岩波講座『日本歴史』第二巻、一九七五年参照。

(30) この時期菊地川中流域の横穴墓に、五弦(伽耶)琴を弾いたり、太鼓や鼓を鳴らすなど従来この地域では見られなかった図像が表現されていることも、新しい葬送儀礼の登場を物語る。高木正文「横穴墓に刻まれた鎮魂の調べと涙」『交流の考古学』一九九一年、参照。なおこうした新しい観念が日本に導入される契機の一つとして、朝鮮に派遣された人々が、百濟や伽耶での実際の葬儀を目の当たりにした可能性も考えられる。

## 追記

脱稿後、谷川健一氏の『白鳥伝説上』を手にすることができた。谷川氏によると遠賀川流域は、かつて物部氏の割拠地であり、「直方市下新人の剣神社には筑紫国造の田道命が筑紫物部をひきいて祀った神社で、倉師大明人と呼ばれたというから、筑紫国造として威勢を張っていた鞍橋君もまたそれと関係があったのであろう」とし、『鞍手郡誌』の「現に郷内に鞍橋君を祀りし黒治社の廢趾あり」の一文を引いて、筑紫国造鞍橋の君は鞍手町新北に居住する賈田物部の一族であったことを推定している。谷川健一『白鳥伝説上』小学館、一九九七年参照。

## 挿図の出版

## 第1図 藏富士寛作成

第2図 森貞次郎「福岡県鞍手郡若宮町竹原古墳の壁画」、「装飾古墳の発生と展開」『九州の古代文化』六興出版、一九八三年、森貞次郎「鳥船塚古墳」小林行雄編『装飾古墳』平凡社、一九六四年。

第3図 森貞次郎「装飾古墳の発生と展開」『九州の古代文化』六興出版、一九八三年。

第4図 高木正文編『熊本県の装飾古墳』熊本県教育委員会、一九八四年。

船に乗る馬(甲元)